

大きくなったFAガール？

まさ (GPB)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

源内 あおの元に送られてきた三人のFAガールが大きくなった!?

pixivにも投稿しています。

目次

大きくなつたF A ガール? | 1

大きくなつたF Aガール？

ある日、うちにF Aガールの轟雷がやってきた。他にも色んな所に轟雷が贈られたらしいけど、起動したのは私の所に来た轟雷だけらしい。

そしてその轟雷のデータが欲しいだとかで、同じくF Aガールのステイ子（ステイレット）とバーゼ（バーゼラルド）まで送られてきて、バトルする事になった。

初めは戸惑つたけど、バトルをするとバイト代が出るらしいし、今は何だかんだこの三人と一緒にいるのが楽しかったりする。

「ああ、ああ」

そんな最近できた可愛い同居人（？）の一人、轟雷の声には私は振り返る。すると目の前に、轟雷が立っていた。

——私と同じ目線、同じ大きさで。

「……………」轟雷……だよね?」

「はい、私は轟雷です。忘れてしまったのですか?」

首を傾^{かし}げる轟雷は可愛いなあ……ってそうじゃない!

「えっと、轟雷、何かおつきくなってる?」

轟雷——いやF Aガールはそもそも、サイズは15c m程度だったはずだよね……。

それが何故? 一体何が? って言うかこの状況が分かんないっ!

「何を言ってるのですか、ああ。私はいつも通りですよ?」

混乱している私を余所に、轟雷は当然のように答える。

いつも通り!? 轟雷、昨日まで小っちゃかったよ!?

と、そこに——

「ちよつと! まだなの!」

「早く行こうよ!」

「……………」え?」

青いツインテールの女の子と、金髪サラサラの女の子が現れた!

この子達は誰!?

「……つて、ステイ子にバーゼ？」

「何、アンタ寝惚けてんの？」

「おつはよー！ あおは寝坊助だね〜」

「バーゼ、アンタが言うな」

びしつとバゼ子の頭にチョップをするステイ子。そしてバーゼがそれに対して「痛いよお〜」と返す。

間違いないく、この二人はステイ子とバーゼらしい。

……んだけど、

「二人もおつきくなってるのね……」

轟雷だけじゃなく、ステイ子とバーゼも手のひらサイズじゃなくなっていた。

「変な事言つてないでさっさと行くわよ！」

「……行くつて、どこに？」

「あほっ子、アンタ自分でした約束も忘れたの？」

身に覚えのない約束の話されてる上に、デイスられたっ!?

「今日はバーゼ達と一緒に、遊びに行くつて約束してたよ〜？」

「あお、忘れてたのですか？」

待つて轟雷、そんなに真つ直ぐ見詰めながら悲しそうに言わないで……!!

「わ、忘れてないよ……?」

自分でも分かるぐらい声震えてるよお……。ステイ子はそのジト目止めてっ!

「はあ、まあいいわ。さっさと行くわよ」

「あ、待ってよ」

そう言つてステイ子とバーゼは外に行つちやつた。

「あお、私達も行きますよ」

「え、あ、うん」

……これ大丈夫なのかな?



「わあ、ウドラだあ」

「……………」

「こんなのどこが可愛いのよ……」

上からバーゼ、轟雷、ステイ子。

バーゼはウドラに抱き付いてはしゃいでる。轟雷も無言だけど、その表情はどこか嬉しそう。

それとステイ子ちゃん、こんなのかどこが可愛いとか言ってるけど、触りたそうにしているのはバレバレだからね？

「あお、写真撮って〜」

「あー、はいはい。ちよつと待って」

私も触りたいし、一緒に写りたいんだけど。

……つていやいや、そうじゃないっ！

結局みんなと遊びに行くとかで付いて来ちゃったけど、これからどうすれば良いの？
とりあえず武希子に聞きに行けばいい？

「あお、次は私と一緒に撮りましょう！」

轟雷、何かキラキラしてるし随分テンション高いね……。

結局バーゼと轟雷にせがまれる形で、幾つか写真を撮った。もちろんステイ子もね。

最初は少し嫌そうにしたのに、最後はノリノリな所とか可愛いんだよね。本人に言ったら顔真っ赤にしそうだけど。

「で、これからどうするの？」

「そうですね……二人はどうします？」

「バーゼお腹空いた！」

「そうね。そろそろいい時間だし、どこかでお昼ご飯にしましょ」

え？ お昼ご飯？

あれ、FAガールはご飯食べないんじゃないかな？

「ではそうしましょう。あお、それでいいですか？」

「えっ？ あ、うん、そうしよっか」

って同意しちゃったけど大丈夫!?

「じゃあ早く行こう！ バーゼ、お腹ぺこぺこだよお」

「分かったから騒がないの。ほんとアンタはいつもそうやって——」

「今そう言うのバーゼ聞きたくない！」

「逃げるなあっ！」

ステイ子のお説教が始まった途端、バーゼが走って逃げた。

「あお、私達も追いかけますよ」

迷子になられても困るし、走りたくないとか言ってられそうにもないなあ。

「しょうがない……二人とも待ってえー!!」

何とか二人に追いついた私達は、近くのファミレスで昼食を済ませて、駅前までやってきた。

みんな普通に食べてたけど、良いのかな？

「はあ、まんぞくまんぞく」

バーゼ、すっごい幸せそうな顔してるね。

「さ、エネルギーも補充できたことだし、腹ごなしするわよ」

「そうですね」

「よおーし、負けないからね！」

え？ 腹ごなし？ 何すんの？

「行くわよっ！」

ステイ子がそう叫んだ瞬間、三人の身体が光った。

「な、何なの!？」

光が収まって目を開けると、そこには完全武装した三人の姿があった。

ちよ、ちよつと待って!?! 腹ごなしってまさか、ここでバトルする気!?

「準備できた？」

「問題ありません」

「おっけー！」

ま、待って——

「セッション!! 見てなさい！」

「GO!!」

「にやははっ!」

.....

「おお、おお」

「んん……あれ?」

「……は……私の部屋?」

「おお、おはようございます」

轟雷の音がする方に目を向けると、机の上に立つ“いつもの”轟雷がいた。

「あれ、轟雷が小さくなってる……」

「小さく? いえ、いつも通りですが」

いつも通り……? あれ……?

「ああ、どうかしたのですか？」

もしかして……と思ひ、自分の頬を掴つかつてみる。痛い。

「あー、やっぱりあれって夢だったんだ……」

「夢……？　どんな夢を見ていたのですか？」

「えっと、三人が私と同じくらいに大きくなって一緒に遊びに行くんだけど、急に装甲アーマー付けてバトルするとか言い出しちゃう夢」

「ああと同じ……」

あ、これ言わない方が良かったかな……？　大きくなるのは無理だし、まだ一緒に外に行った事もないし……。

「バーゼも遊びに行きたーい！」

「ダメよ、外は危ないんだから」

やってきたバーゼとステイ子も小さい。当たり前だけど。

「バーゼラルド、ステイレット。おはようございます」

「おつはよー！」

「おはよ」

バーゼも遊びに行きたいけど、外は危ないかあ……。

「私の目の届く所でなら、良いんじゃない？」

確かに三人だけだと危ないかもしれないけど、私が近くにいれば大丈夫でしょ。

「確かにそうかもしれないけど……」

「じゃあ今週末、土曜日にもみんな遊びに行こっか」

「良いの!? やったー!」

「し、仕方ないわね」

仕方ないとか言っても、嬉しそうにしてるの分かるからね？

「あおと、皆と外に……」

「轟雷も楽しみ？」

「……はい。楽しみです」

「へへ、良かった」

轟雷も初めて会った時より笑顔が増えてきたね。いい感じいい感じ。

「あお、時間は良いのですか？」

「時間？ 一体何の……あつ！」

「ヤバい！ 早くしないとまた遅刻する!!」

「締まらないわね」

「あはは、あおいつそげ〜!」

